

## 【査読論文】

# コミュニティウェルビーイングへの持続可能な観光の貢献 ～農泊推進地における幸福度からの示唆～

岡田 美奈子（追手門学院大学 地域創造学部 教授）

## 要約

「住んでよし、訪れてよし」の国づくりを目指し、国をあげて、持続可能な観光の推進を通じた観光立国実現への取り組みが加速している。様々な社会課題や地域課題への対応として、観光による地域内好循環を創出する仕組みをつくり、持続可能な社会基盤の構築を目指す地域も少なくない。持続可能な観光の基盤は地域にあり、地域主体の観光の実現により、観光の効果が発揮され、地域のウェルビーイングにも貢献しうる。これまで、ウェルビーイングの視点での観光研究やウェルビーイングへの観光による効果の評価や測定方法は十分に検討されてきていない。本研究では、地域の幸福度と相関の高い「地域のつながり」と「多様性・寛容性」に着目し、観光とウェルビーイングの関係性を考察した。地域主体の観光が推進されている農村地域（農泊推進地）では、観光がウェルビーイング（コミュニティウェルビーイング）に貢献している可能性が示唆された。

## 1. はじめに

### （1）研究の背景

コロナ禍を経て、これまで以上に「ウェルビーイング」や「幸福」への関心が高まっている。観光分野においても、観光客が地域を訪れることで地域内の好循環を高める仕組みをつくり、地域だけでなく、住む人々、そして、訪れる人々も再生する「リジェネラティブツーリズム」が注目されている。

「地球上の誰一人取り残さない」、経済・社会・環境の3つのバランスがとれた持続可能な社会の実現を目指して国連が設定している2030年までに達成すべき「17の持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals:SDGs)」は、あらゆる人々にとってのウェルビーイングを目指す目標である。SDGsには17の目標とそれをさらに具体化した169のターゲットがあるが、目標8（働きがいも経済成長も）目標12（責任つかう責任）目標14（海の豊かさを守ろう）

に関連するターゲットには、「観光」の言葉が明記されている。国連世界観光機関では、観光には、直接的・間接的にすべての目標に貢献する潜在力があるとし、政策立案者、国際組織、学術関係者、企業等、観光に関する全てのステークホルダーによる SDGs 達成への貢献・参画を促している。一方で、SDGs やウェルビーイングへの観光の貢献を客観的に評価する統一の基準や指標や関連の研究はほとんどなされておらず、観光の効果が十分に理解されていない。

ニュージーランドやフィンランドなど、サステナブルツーリズムへの取り組みが進む国や地域では、観光に対する住民満足度調査等を実施し、観光政策や方針等の検討に反映されている。観光庁の調査(2023)<sup>1</sup>によると、日本全国の自治体・観光地域づくり法人(DMO)の7割以上が観光に対する住民満足度の目標設定およびデータ計測を実施していない。同様に、約7割が観光客の満足度の目標設定およびデータ計測を実施していない。京都市や岐阜県白川村など、主に観光客が集中する地域においては、住民の観光への感情や地域の課題把握のために住民調査を実施し、政策や課題への対応が検討されている。しかしながら、これらの調査は、地域の観光や観光政策に対する満足度を知ることが主目的であり、観光と地域・住民のウェルビーイングとの関係性やその貢献度を評価するための十分な情報は得られてはいない。

## (2) 研究の目的

多様な社会課題を改善し、ウェルビーイングな地域づくりを実現する手段として観光への期待は高い。一方、ウェルビーイングの視点での観光研究やその観点も取り入れた観光効果の評価の検討も進んでいない。本研究は、持続可能な観光がウェルビーイング(コミュニティウェルビーイング)に貢献しうるのかを探るとともに、幸福度と観光の関連性についての仮説を見出し、ウェルビーイングを重視した観光効果の測定を検討する必要性についての示唆を得ることを目的とする。

## (3) 研究の方法

国内外の先行研究から、幸福度とウェルビーイングの考え方について整理する。あわせて、国内外の幸福度やウェルビーイングの調査に活用されている測定

指標を概観する。その後、観光とウェルビーイングとの関係性について、全国の市町村を対象にデジタル庁が実施しているウェルビーイング調査の結果をもとに、地域のウェルビーイングと相関の高い因子に着目し考察する。なかでも、地域主体の観光を推進する農村地域における幸福度と観光との関係性に注目し、観光がどのようにコミュニティウェルビーイングに影響しているか示唆を得る。

## 2. 「幸福度」「ウェルビーイング」に関する先行研究

「ウェルビーイング (well-being)」は、1946 年、世界保健機関 (WHO) 設立時に、「健康」を定義づける言葉として使われたのが始まりである。WHO では、「健康とは、病気ではないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあること」<sup>2</sup>と定義づけている。幸福は「ハピネス」と訳されることもあるが、ハピネスは「瞬間的に感じる幸福」の意味合いが含まれるのに対し、ウェルビーイングは「持続的な幸福」を示す。一般的にウェルビーイングは、身体的・精神的な健康、社会的なつながり、経済的な状況などの様々な要素が含まれ、個人の健康や幸福の状態を包括的に表す言葉である。一方、幸福は、喜びや満足感などの主観的な感情や心理的状态を指すと理解されている。

### (1) 「幸福」に関する研究の広がり

人間は何によって「幸福」を感じるのか。幸福の概念は、アリストテレス、エピクロス、プラトンなどの古代ギリシャの哲学者たちによって、様々な理論が提唱された。20 世紀初頭、心理学的側面からセリグマンやチクセントミハイなどによる「ポジティブ心理学」が発展し、幸福やポジティブな感情に焦点が当てられ、幸福の構成要素やその測定方法が研究されはじめた。社会学・経済学の分野からは、レイヤードなどにより、精神的健康と幸福や経済成長と幸福の関係などの視点から幸福に影響を与える要因が探求されるようになった。レイヤード (2006)<sup>3</sup>は、幸福に影響をもたらす7つの要因 (ビッグセブン) として、①家族関係、②家計の状況、③雇用状況、④コミュニティと友人、⑤健康、⑥個人の自由、⑦個人の価値観を紹介した。この発表以降、経済学以外の分野でも幸福度や生活満足度が注目され、心理学や社会学の知見を取り入れた幸福の概念、幸福

指標による効果評価などの科学的研究を政策提言に役立てる議論が広まり、現在では政策立案や決定において幸福に関わる研究は重要な役割を果たしている。

### 人生満足度尺度 (the Satisfaction With Life Scale : SWLS)

幸福研究の第一人者、ディーナーら (1997) は、「幸福」について、「生活に満足し、喜びを感じることが多く、悲しみや怒りといった嫌な感情をあまり感じないならば、その人の幸福度は高い、反対に生活に不満があり喜びや愛情をほとんど感じず、怒りや不安のような嫌な感情を抱くことが多いならば、その人の幸福度は低い」<sup>4</sup>という包括的な定義を提示している。1985年には、ディーナーの研究グループにより、自分の幸福度を簡単に測定する方法として、「人生満足度尺度」(Diener, Emmons, Larsen, & Griffin, 1985)<sup>5</sup>が開発された。同指標は、主観的なウェルビーイングの尺度として、①人生満足度、②ポジティブ感情、③ネガティブ感情がないことの3要素を開発し、様々な要因と合わせて測ることで、性格や社会環境との関係を調べるもので、個人幸福度や生活満足度を評価するツールの一つとして普及している。以下の5つの質問に対して7段階で回答することにより、「幸福」という言葉の曖昧さや直近の気分の影響を受けにくくし、「主観的幸福度」を測定する。

#### < 5つの質問 >

- (1) ほとんどの面で私の人生は私の理想に近い
- (2) 私の人生はとても素晴らしい状態だ
- (3) 私は自分の人生に満足している
- (4) 私はこれまで自分の人生に求める大切なものを得てきた
- (5) もう一度人生をやり直せるとしてもほとんど何にも変えないだろう

### 心理的ウェルビーイング理論

リフ (1989) によって、自分が生きていることに意味があり、人生の意義や目的意識から得られる満足感・幸福感を指す「心理的ウェルビーイング理論 (ユーダイモニック・ウェルビーイング)」が提唱された。人が幸せを感じる心理的ウェルビーイングに分類し計測する「6軸モデル」<sup>6</sup>が開発された。



- ① 自己受容 (Self-Acceptance) :  
自分の良いところ、悪いところを受け入れていること。
- ② 環境適応力 (Environment Mastery) :  
複雑な環境を的確に制御していると感じること。
- ③ 他者との良好な関係 (Positive Relations with others) :  
他者との愛情、信頼、共感といったポジティブな関係を築いていること。
- ④ 自己の成長 (Personal Growth) : 成長して発達し進歩を実感すること。
- ⑤ 人生の目的の明確さ (Purpose in Life) :  
人生の目的と自分の生きる方向性を自覚していること
- ⑥ 自律性 (Autonomy) : 自律して自己決定していること。

### プロスペクト理論

1979 年、カーネマンとトベルスキーが共同で「プロスペクト理論」<sup>7</sup>を発表した。これは、「人は損失を回避する傾向があり、状況によってその判断が変わる」という意思決定に関する行動経済学の理論のひとつである。プロスペクト理論の柱として、意思決定にかかわる「確率加重変数」と「価値関数」の 2 つの要素があり、人は確率が低いときに大きく評価し、確率が高いときには小さく評価しているとうものである。人は、等しい量の利益と損失があった場合、損失によって感じる痛みの方が利益によって感じる幸福より大きいことを表し、価値を主観的に判断する人間の特性を示している。また、プロスペクト理論には「損失回避性」「参照点依存性」「感応度逓減性」という 3 つの心理作用がある；

・ 損失回避性の心理作用：

「手に入れる」ことよりも「損をする」ことを回避する心理作用

・ 参照点依存性の心理作用：

価値を「絶対的ではなく、相対的」に判断する心理作用

・ 感応度逓減性：

同じ損失額でも、母数が大きくなるほど鈍感になるという心理作用

カーネマンとデートン (2010) <sup>8</sup>の研究では、「年収 7.5 万ドルまでは、収入が増えれば増えるほど幸福度は比例して大きくなるが、それ以上収入が増えても

幸福度はほぼ変わらない」ことを科学的に明らかにした。人間が感じる幸福の感情は、あるレベルまでは収入に比例して増えていくが、収入が一定水準を超えると幸福度は上昇しなくなり「収入と幸福感とは相関しない」というものである。

前野の研究（2012）<sup>9</sup>によると、人間の欲求を満たす「財」には、収入や物、社会的地位など周囲との比較で価値が決まる「地位財」と、自由や愛情、感謝、社会への帰属意識など他人との比較を前提としない「非地位財」の2つがある。

「地位財」による幸福は、欲望充足型で、保有量の増加に伴いその効用が低下する限界効用逓減の法則が働き幸福感が長続きしないが、愛情や感謝などの「非地位財」による幸福は、その状態に慣れても何も感じなくなることはないため長続きする。長続きするウェルビーイングは、収入のような地位財で得られるものではないことは数々の調査から示唆されているが、最新の研究（Killingsworth et al, 2023）では、幸福度が低いグループと高いグループに分けて分析した結果、「幸福度が高いグループの人々では、年収が7.5万ドル以上になっても、幸福度は伸び続ける」<sup>10</sup>という結果も示されている。

## PERMA 理論

2000 年前後、セリグマンらによって「ポジティブ心理学」が創始され、ウェルビーイングが研究されてきた。セリグマンが提唱した PERMA 理論は、ウェルビーイングを高めるための5つの要素<sup>11</sup>があり、これらの要素に積極的に取り組むことで、ウェルビーイングが高まり、心理的な苦痛も減少するというものである。これらの要素は、人々が自由に選択するものと位置付けられている。

### <5つの要素>

① ポジティブな感情 (Positive Emotion)	希望、興味、喜び、愛、思いやり、誇り、娯楽、感謝などがあり、幸福度の主要な指標。また、「ネガティブな感情を打ち消し、レジリエンス力を高める」「思考、行動の選択肢を広げる」などにより、ウェルビーイングを高める要素が創造される感情。
② エンゲージメント (Engagement)	時間を忘れて何かのにめり込み没頭している状態（フロー状態）のこと。現在の瞬間に生きる、目の前の仕事に集中し、没頭や没入の領域に入ると「集中力が高まる」「効率性が良くなる」「生産性が向上する」。ウェルビーイングな心理状態の一種。
③ 関係性 (Relationship)	パートナー、友人、家族、同僚、上司、指導者、監督者、そしてコミュニティ全体との相互作用を指す。社会において、利他

	的な関係、人と助け合う関係を持っている人は幸せであることが明らかにされている。また「自己と他者を比較しない」「他者に貢献する」なども、幸福をもたらすとされている。
④ 意味・意義 (Meaning)	自分自身よりも大きなものに所属し、または何かに奉仕することで、有意義な人生となる。人生の目的を持つことは、困難や逆境に直面した時に、本当に大切なものに焦点を当てる助けになる。人生の目的がある人は、より長生きし、人生の満足度が高く、健康問題が少ないことが知られている。
⑤ 達成 (Achievement)	目標に向かって努力し、その目標を達成した結果。自己動機付け・内発的動機から何かを成し遂げる、あるいはそのために一所懸命がんばっている状態の人は幸せである。個人が誇りを持ち自分の人生を振り返ることはウェルビーイングに貢献する。

## フロー理論

1990 年、ポジティブ心理学の創始者の一人、チクセントミハイによって「フロー理論」が提唱された。フロー理論は、教育、ビジネス界のみならず、芸術、スポーツ他、あらゆる分野に大きな影響を与えている。フローとは、「時を忘れるくらい、完全に集中して対象に入り込んでいる精神的な状態」<sup>12</sup>で、人間がフロー状態に入ると雑念に囚われることなく集中し、その人の最大限の力が発揮されるというものである。目の前の課題に没頭することは自己成長を促し、その行為を心の底から楽しむことが、満足感や幸福感につながる。チクセントミハイは、フロー状態を導く 7 つの条件として、以下をあげている。

- ① 目標の明確さ：何をすべきか、どうやってすべきか理解している
- ② どれくらいうまくいっているかを知ること：  
ただちにフィードバックが得られる
- ③ 挑戦と能力の釣り合いを保つこと：活動が易しすぎず、難しすぎない
- ④ 行為と意識の融合：自分はもっと大きな何かの一部であると感じる
- ⑤ 注意の散漫を避ける：活動に深く集中し探求する機会を持つ
- ⑥ 自己、時間、周囲の状況を忘れること：  
日頃の現実から離れたような忘我を感じる
- ⑦ 自己目的的な経験としての創造性：  
活動に本質的な価値がある、活動が苦にならない

## 幸福の4つの因子

前野らの研究（2012）から、幸福感と深い相関関係がある、以下の4つの因子<sup>13</sup>の存在がわかった。

やってみよう因子 (自己実現と成長の因子)	「自分の強みを活かしている」「自分が成長している実感がある」などの要素。人間は目標ややりがいを持ち、「なりたい自分」をめざし成長していくときに幸福を感じる。
「ありがとう」因子 (つながりと感謝の因子)	「人を喜ばせている」「感謝することはたくさんある」などの要素。多様な人とつながりを持ち、人を喜ばせる、人に親切にする、感謝することが幸せをもたらす。
「なんとかなる」因子 (前向きと楽観の因子)	「ものごとが思い通りにいくと思う」「失敗や不安をあまり引きずらない」などの要素。いつも前向き。「自分のいいところも悪いところも受け入れる」自己受容ができていて、「なにがあってもなんとかなる」と楽観的な人は幸せになりやすい。
「ありのままに」因子 (独立と自分らしさの因子)	「自分と他人を比べずに生きている」「人目を気にせず物事を楽しめる」などの要素。人目を気にせず、自分らしく生きていける人は、他人との比較によらない非地位財を大切にする傾向があるため、長続きする幸せを手に入れやすい。

先行研究から、観光客を受け入れる地域の視点にたち、コミュニティウェルビーイングと観光との関係性を検討する。PERMA理論における「ポジティブな感情」「関係性」、「意味・意義」は、観光客との交流により、影響を受ける要素として考えられる。また、幸福の4つの因子のうち、「ありがとう」や「ありのまま」因子は、観光とも関係が深い。なかでも、「ありのまま (Authenticity)」は、そのものが本物・真実であり、偽りや模倣ではないことを指す。また、自分の内面や価値観に忠実であることを指す。個人の真の自己を理解し、表現することに焦点を当てた心理学や哲学の概念でもある。観光地や観光事業においても、「本物感」「ありのまま」の議論はしばしば行われている。地域がもともと有する固

有の資源やそれらを活用した体験、すなわち「唯一無二の地域の価値」が観光を通して提供され、観光客からその価値が評価される。ありのままの地域の姿が外部から高く評価されることは、地域の観光関係者だけでなく、地域住民の誇りや満足度にもつながる。自分が暮らす地域に対する評価や尊敬は「非地位材」に相当する。観光を通して「シビックプライド」の醸成を目指す地域も増えている。

観光客側の視点では、様々な地域に訪れ、多様な人々と交流することで視野が広がる、自己成長につながる、地域の人々との関係性が生まれる、同行者との絆が深まるなど、観光を通じた効果は幅広く、心理的ウェルビーイング理論の「6軸モデル」のすべてに関連する。観光がもたらすと想定される効果について、科学的に評価・検証し、ウェルビーイングと観光との関係性を解明することにより、観光が貢献できる分野は、さらに広がるものと期待する。

### 3. 「ウェルビーイング」「幸福度」の測定指標

「ウェルビーイング」や「幸福」の概念や定義にもとづき、それらを測る様々な手法が研究されてきた。国際的には、「国の豊かさ」の測定指標として、GDP（国民総生産）があるが、GDPは、「一国の領土内で一定期間に政府、全企業、非営利組織、家計によって行われたすべての生産を、財・サービスの種類にかかわらず数値化したもの」<sup>14</sup>（OECD）であり、幸福度を測定するものではない。国単位では、イギリスの「ウェルビーイング・ダッシュボード」、フランスの「New Wealth Indicators」、イタリアの「公平で持続可能なウェルビーイングダッシュボード」、ニュージーランドの「ウェルビーイング・ダッシュボード」<sup>15</sup>など、それぞれの国で生活の質に関する評価の手法が検討され、設定された指標のもとで測定された結果が国の政策検討に活用されている。

OECDでは、2011年、GDPの数値とは異なる方法で幸福度を測る指標として、「より良い暮らし指標（Better Life Index：BLI）」<sup>16</sup>を開発した。本指標は、2008年に設立された「経済成果と社会進歩の計測に関する委員会（スティグリッツ委員会）」によって開発が進められた、人々が暮らしを計測、比較することを可能にするインタラクティブな指標である。OECDのウェルビーイングの枠組みやその指標は、内閣府「満足度・生活の質を表す指標群（Well-beingダッシュボード）」を検討する土台や諸外国における主観的ウェルビーイングの指標群



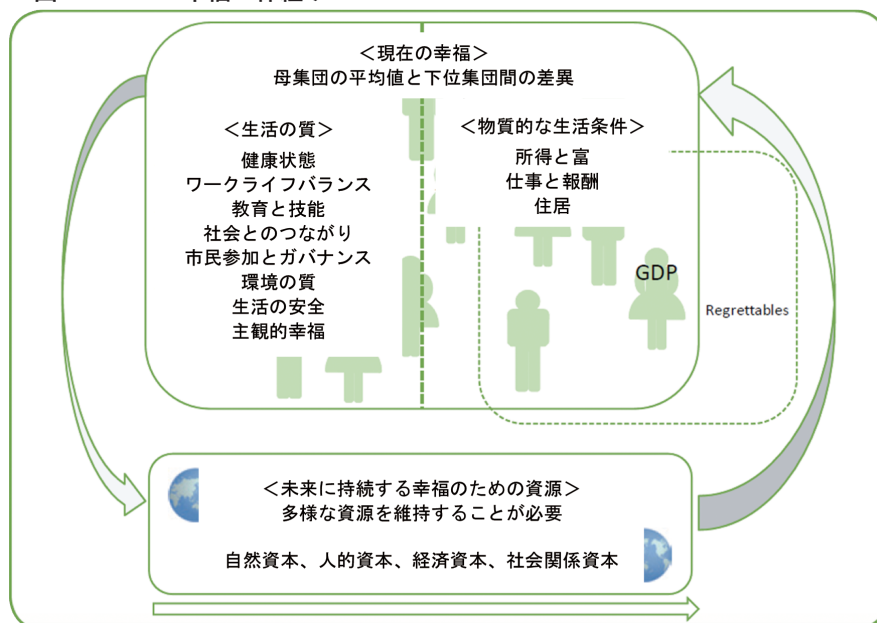
を策定する際にも参考とされている。

(1) OECD「Better Life Index（より良い暮らし指標、以降、BLI）」の概要<sup>17</sup>

BLI は、7 言語に対応、オンライン上で利用者が自分の生活の満足度を測り比較できる。現在、OECD 加盟 37 カ国とブラジル、ロシア、南アフリカの全 40 カ国の指標を比較できるが、国の環境や国民性などにより、幸福度指標の数値の現れ方には影響が出ると考えられ単純比較には留意を要する。各国と比較した自国の特徴や特定の国における項目ごとの経年変化などを把握する上では有用であり、国々の政策立案や改善のための重要な情報源として利用されている。

BLI は、主観的指標と客観的指標を組み合わせた 11 の要素から「現在の幸福」を示している。11 の要素は、人々の経済的選択肢を形成する「所得と富」「雇用と仕事の質」「住居」などの「物質的条件」、また「主観的幸福」「知識と技能」「環境の質」「健康」「安全」「ワークライフバランス」「社会とのつながり」「市民参画」などの「生活の質」で構成される（図1）。測定には、各国の平均値に、3 種類の不平等（人口集団間の格差、最上位層と最下位層の格差、技能や健康における下限の閾値未満の人口割合）を加えている。「現在の幸福」を持続可能なものにするためには、各国における資本・資源、投資状況、リスク、レジリエンスを把握す

図1 OECD 幸福の枠組み



出典：OECD2011 をもとに筆者作成

ることが必要であり、それらのデータを「未来の幸福の資源」として示している。

「未来の幸福の資源」は、「自然資本」「経済資本」「人的資本」「社会関係資本」の4つの要素から構成され、経済資本には人工資産と金融資産、自然資本には自然資産（自然資源のストック、土地被覆、生物多様性など）や生態系（海洋、森林、土壌、大気など）が含まれる。人的資本は個人の技能と未来の健康、社会関係資本は協働を促す社会的規範、共有される価値観、慣習的制度を指す（表1、表2）。

表1 現在の幸福のヘッドライン指標：現在の幸福の平均値、現在の幸福の不平等

幸福の側面	指標名	指標の内容
所得と富	家計の所得	家計の調整総可処分所得
	家計の富	家計の純資産の中央値
	所得の五分位比率	所得の平均等価可処分所得の分布の下位20%の所得に対する上位20%の所得の比
住居	住宅取得能力	住居費を除いた家計の可処分所得
住宅	過密状態の住居	過密状態の住居
仕事と仕事の質	就業率	就業率
	賃金の男女格差	賃金の男女格差
	長時間労働	長時間労働を行う有償雇用者
健康	平均余命	出生時平均余命
	平均余命の学歴格差	25歳時点での低学歴と高学歴の男性の平均余命の差
知識と技能	生徒の科学的リテラシー	15歳の生徒の認知技能（科学的リテラシー）
	低技能の生徒	数学的リテラシー、読解力、科学的リテラシーのスコアが低い15歳未満の生徒
環境の質	緑地へのアクセス	緑地へのアクセス
	大気汚染への暴露	WHOが定めた閾値を超える微小粒子状に曝されている人口
主観的幸福	生活満足度	生活満足度
	ネガティブな感情バランス	ネガティブな感情バランス
生活の安全	殺人率	加害による死
	安全感的男女格差	夜間の安全感的男女格差
ワーク・ライフ・バランス	余暇時間	レジャーとパーソナルケアに充てる時間
	労働時間の男女格差	15～64歳の男性と女性の有償労働と無償労働に費やす時間の差
社会とのつながり	社会的交流	主行動として友人や家族と過ごす時間
	社会的支援	社会的支援の欠如
市民参加	投票率	投票率
	政府への発言権	政府への発言権

出典：幸福の資源の指標（OECD2017a,2019）をもとに筆者作成

表2 現在及び未来の幸福の資源の指標

側面	指標名	指標の内容
経済資本	生産固定資産	生産固定資産
	一般政府の純金融資産	一般政府の調整純金融資産
	家計の負債	家計の負債
自然資本	温室効果ガスの排出	国内生産による温室効果ガスの総排出量
	マテリアルフットプリント	経済の最終需要を満たすために採取された天然資源量
	絶滅危惧種のレッドリスト指数	絶滅危惧種のレッドリスト指数
人的資本	若年成人の学歴（25～34歳）	若年成人における後期中等教育以上修了者
	未活用労働力	労働力の未活用率、不完全就業者が労働人口に占める割合
	若年死亡	疾患や死亡事故によって失われた可能性のある余命
社会関係資本	他者への信頼	対人信頼
	政府への信頼	中央政府への信頼
	政治におけるジェンダーパリティ	国会議員に女性が占める割合

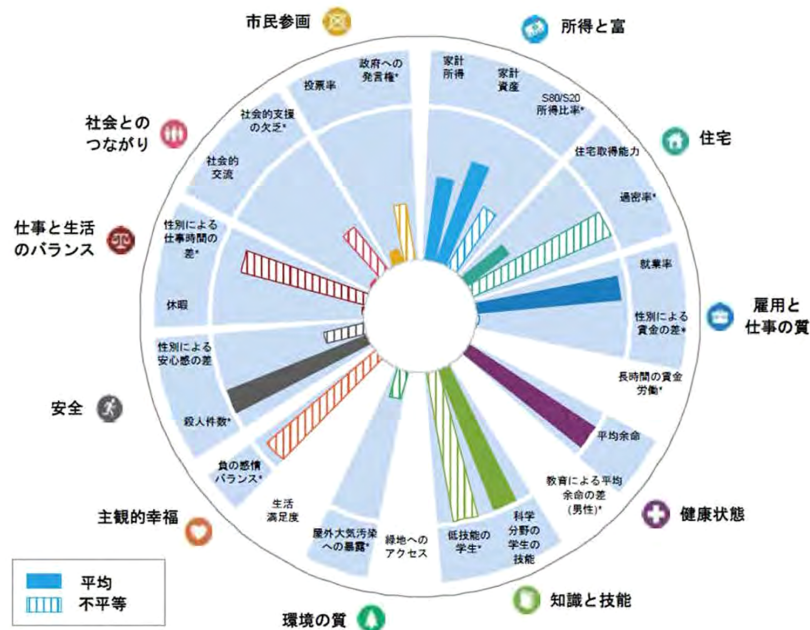
出典：幸福の資源の指標（OECD2017a,2019）をもとに筆者作成

## (2) 日本の BLI の状況

BLI による分析結果は、2 年に一度、「How's Life」<sup>18</sup> として公表される。2020 年の日本の結果は、コスタリカを除く OECD 加盟 37 カ国中 25 位だった。日本は、「安全」「雇用と仕事の質」「教育」でスコアが高いが、「ワークライフバランス」「市民参画」「社会とのつながり」などのスコアが劣っている（図 2）。

図 2 OECD how's Life 日本の幸福度（2020 年 3 月）

日本の幸福度（2018 年またはデータが利用可能な直近年）



（参考）日本の順位

就業率	平均余命	科学分野の学生の技能	殺人件数	投票率	社会的交流	休暇
5/41	1/41	2/41	1/41	37/41	24/24	22/22

出典：内閣府「内閣府における経済・財政一体改革、満足度調査の取組」

### <11 分野のスコア>

ハウジング：6.1、所得：3.6、求人：8.3、コミュニティ：5.5、教育：7.7、環境：6.7、市民参画：2.0、健康：5.3、人生の満足度：4.1、安全性：8.4、仕事と生活のバランス：3.4

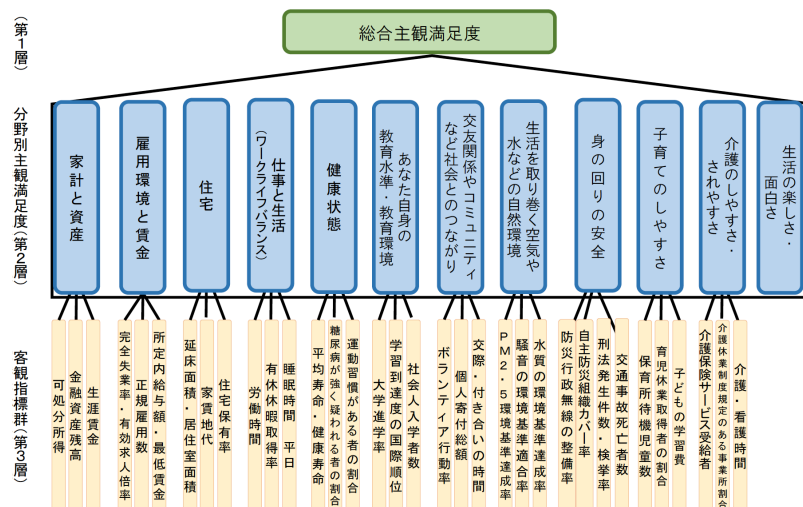
## 4. 日本におけるウェルビーイング指標に関わる動き

日本においても、国や地域レベルで、国民や住民のウェルビーイングや幸福度を測定するための様々な指標が策定されている。その多くは諸外国政府機関が採用している手法と同様に、主観的指標・客観的指標の双方を盛り込んでいる。

# (1) 内閣府による「満足度・生活の質に関する調査」<sup>19</sup>

内閣府では、2019 年から国民が自己評価する主観的な生活満足度に関する意識調査を実施している。同調査では、主観的ウェルビーイングの代表的指標として「総合的な生活満足度」の計測と、これを客観的指標と紐づける分野別満足度を取り入れ、独自の指標群「満足度・生活の質を表す指標群 (Well-being ダッシュボード)」を策定している (図3)。第1層に、全体的な生活満足度 (総合主観満足度)、第2層に、「家計と資産」「健康状態」などの11の分野別満足度を位置付けている。11分野は、OECDのBLIをベースに「全体的な生活満足度」と「分野別満足度」の関係を統計的に分析して設定し、第3層には11分野別の客観指標群を位置づけている。総合的な生活満足度や各分野の満足度は、経済指標等の客観指標と紐付け、分野ごとの満足度と生活満足度との関係や分野ごと、あるいは総合的な生活満足度についての客観指標との対応関係も分析できる。本指標の策定の際には、OECDのBLIを参考としているが、OECDの指標と異なる点がある。たとえば、OECDでは「主観的ウェルビーイング」は、11領域のひとつだが、内閣府では「主観的ウェルビーイング」が第1層の「全体的な生活満足度」として最上位の指標として位置づけられ、第3層の「客観指標群」の上位に第2層の「分野別主観満足度」が位置付けられている。OECDの指標では、「状態の客観的な測定」に重点がおかれている一方、内閣府の指標では、「主観的な満足度」が重視されている。「ウェルビーイング」を、より多面的に理解し計測する海外に対して、主観的側面から理解し計測する日本との違いが示されている。こうした違いがウェルビーイングの実現に向けて、どのような影響をもたらすかは、研究を要するところである。

図3 内閣府「満足度・生活の質を表す指標群 (Well-being ダッシュボード)」の体系図

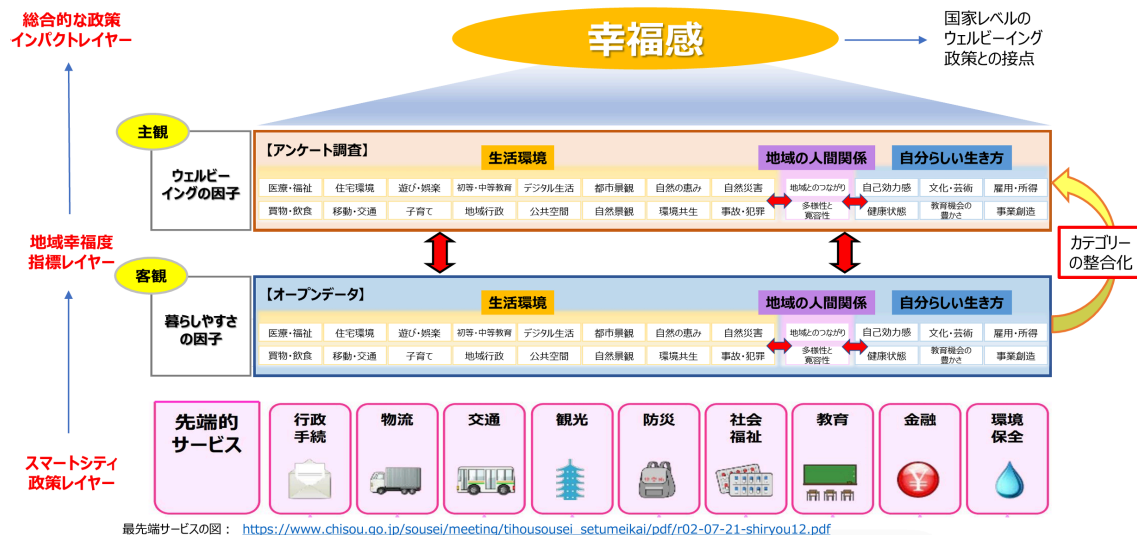


出典：内閣府「満足度・生活の質に関する調査報告書 2023～我が国の Well-being の動向～」

## (2) デジタル庁「デジタル田園都市国家構想」<sup>20</sup>

2021年、「デジタル実装を通じて地方が抱える課題を解決し、誰一人取り残されずすべての人がデジタル化のメリットを享受できる心豊かな暮らしを実現」する「デジタル田園都市国家構想」への取組が始まった。地域の個性や魅力を維持しながら、都市と変わらない利便性を実現し、地域で暮らす人々の心豊かな暮らしの向上と持続可能な環境・社会・経済の確保を目指す構想である。具体的な施策として、①デジタルの力を活用した地域の社会課題解決、②デジタル田園都市国家構想を支えるハード・ソフトのデジタル基盤整備、③デジタル人材の育成・確保、④誰一人取り残されないための取り組みが行われている（図4）。

図4 地域幸福度（Well-Being）指標の全体構成図



出典：一般社団法人スマートシティ・インスティテュート(2023)「地域幸福度（Well-Being）指標」

## 地域幸福度（Well-Being）指標

「デジタル田園都市構想」推進のために、客観指標と主観指標のデータをバランスよく活用し、市民の「暮らしやすさ」と「幸福感」を指標で数値化・可視化する「地域幸福度（Well-Being）指標」が、以下の基本概念・目的のもと開発・導入された；

基本概念	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ウェルビーイング（Well-being）：                     <ul style="list-style-type: none"> <li>身体的・精神的・社会的に良好な状態にあること</li> </ul> </li> <li>・ 健康の社会的決定要因（Social Determinants of Health）：                     <ul style="list-style-type: none"> <li>健康とは、病気ではないとか、弱っていないというわけではなく、肉体的、精神的、社会的にも、すべて満たされた状態（ Well-being ）にあること</li> </ul> </li> </ul>
------	--



目的	<div>・スマートシティ・まちづくりにおける「人間中心主義」を明確化</div> <div>・市民の視点から「暮らしやすさ」と「幸福感」を数値化・可視化</div> <div>・ランキングではなく、自治体が「個性を磨く」機会を創出</div> <div>・WHO 等の国際的な枠組みを導入</div> <div>・客観と主観データの両方を活用。無料でオープン化</div> <div>・まちづくりのEBPM・ワイズスペンディングに役立てる</div>
----	--

地域幸福度指標は、地域における幸福度・生活満足度を計る4つの設問と、3つの因子群（生活環境、地域の人間関係、自分らしい生き方）から構成され、因子群は合計24のカテゴリーに細分化されている。地域幸福度指標は、各地域の政策とその政策のインパクトとして現れる市民の幸福感を紐づけて活用する。また、主観指標と客観指標を同じ因子構成とし、主観と客観の紐づけを簡素化することで、因子間の関連から各自治体が注目すべき因子が抽出できる。主観指標はアンケート調査から市民のウェルビーイングを、客観指標ではオープンデータから暮らしやすさを測定する（表3）。

表3 デジタル庁 主観（ウェルビーイング）評価指標 50問

No.	因子	設問
1	幸福度・満足度	現在、あなたはどの程度幸せですか。
2	幸福度・満足度	現在、あなたの住んでいる地域の暮らしにどの程度満足していますか。
3	幸福度・満足度	あなたの町内（集落）の人々は、大体において、どれぐらい幸せだと思いますか。
4	幸福度・満足度	自分だけでなく、身近なまわりの人も楽しい気持ちでいると思う
※	幸福度・満足度	今から5年後、あなたはどの程度幸せだと思いますか。※オプション設問：自治体にて判断し追加する
生活環境（16因子、27問）		
No.	因子	設問
5	医療・福祉	暮らしている地域は、医療機関が充実している
6	医療・福祉	私の暮らしている地域では、介護・福祉施設のサービスが受けやすい
7	買物・飲食	暮らしている地域は、日常の買い物にまったく不便がない
8	買物・飲食	私の暮らしている地域では、飲食を楽しめる場所が充実している
9	住宅環境	自宅には、心地のいい居場所がある
10	住宅環境	【逆】自宅の近辺では、騒音に悩まされている
11	住宅環境	私の暮らしている地域では、適度な費用で住居を確保できる
12	移動・交通	私の暮らしている地域では、公共交通機関で、好きな時に好きなところへ移動ができる
13	遊び・娯楽	私の暮らしている地域には、楽しい時間を過ごせる娯楽施設がある
14	子育て	私の暮らしている地域では、子育て支援・補助が手厚い
15	子育て	私の暮らしている地域では、子どもたちがいきいきと暮らせる
16	初等・中等教育	私の暮らしている地域では、教育環境（小中学校）が整っている
17	初等・中等教育	私の暮らしている地域では、通学しやすい場所に学校がある
18	地域行政	暮らしている地域の行政は、地域のことを真剣に考えていると思う
19	地域行政	暮らしている地域の公共施設は使い勝手がよく便利である
20	デジタル生活	私の暮らしている地域では、行政サービスのデジタル化が進んでいる
21	デジタル生活	私の暮らしている地域では、仕事や日常生活の場でデジタルサービスを利用しやすい
22	公共空間	暮らしている地域の雰囲気は、自分にとって心地よい
23	公共空間	私の暮らしている地域には、まちなか、公園、川沿い等で、心地よく歩ける場所がある
24	都市景観	私の暮らしている地域には、自慢できる都市景観がある
25	自然景観	私の暮らしている地域には、自慢できる自然景観がある
26	自然の恵み	暮らしている地域では、身近に自然を感じることができる
27	自然の恵み	暮らしている地域の空気や水は澄んでいてきれいだと感じる
28	環境共生	私の暮らしている地域では、リサイクルや再生可能エネルギー活用等、環境への取り組みが盛んである
29	自然災害	私の暮らしている地域では、防災対策がしっかりしている
30	事故・犯罪	私の暮らしている地域は、防犯対策（交番・街燈・防犯カメラ・住民の見守り等）が整っており、治安がよい
31	事故・犯罪	私の暮らしている地域では、歩道や信号が整備されていて安心である
地域の人間関係（2因子、10問）		
No.	因子	設問
32	地域とのつながり	私は、同じ町内（集落）に住む人たちを信頼している
33	地域とのつながり	私の暮らしている地域では、地域活動（自治会・地域行事・防災活動等）への市民参加が盛んである
34	地域とのつながり	暮らしている地域には、困ったときに相談できる人が身近にいる
35	地域とのつながり	私は、町内（集落）の人が困っていたら手助けをする
36	地域とのつながり	私は、この町内（集落）に対して愛着を持っている
37	多様性と寛容性	この町内（集落）には、どんな人の意見でも受け入れる雰囲気がある
38	多様性と寛容性	私は、見知らぬ他者であっても信頼する
39	多様性と寛容性	私は、町内（集落）の人が自分をどう思っているかが気になる
40	多様性と寛容性	私の暮らしている地域には、女性が活躍しやすい雰囲気がある
41	多様性と寛容性	私の暮らしている地域には、若者が活躍しやすい雰囲気がある
自分らしい生き方（6因子、9問）		
No.	因子	設問
42	自己効力感	自分のことを好ましく感じる
43	健康状態	私は、身体的に健康な状態である
44	健康状態	私は、精神的に健康な状態である
45	文化・芸術	暮らしている地域は、文化・芸術・芸能が盛んで誇らしい
46	文化・芸術	将来生まれてくる世代のために、良い環境や文化を残したい
47	教育機会の豊かさ	私の暮らしている地域では、学びたいことを学べる機会がある
48	雇用・所得	私の暮らしている地域では、やりたい仕事を見つけやすい
49	雇用・所得	私の暮らしている地域では、適切な収入を得るための機会がある
50	事業創造	暮らしている地域には、新たな事に挑戦・成長するための機会がある

出典：一般社団法人スマートシティ・インスティテュート(2023)「地域幸福度（Well-Being）指標」

本指標を用いて、2023年5月5日に85,000人を対象に実施された全国 Well-Being 調査の結果について概観する。

スコアは、①～④が11段階評価、⑤のみが5段階評価となっている。

① 幸福度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全体平均：男性 6.35 女性 6.52、全般的に女性が高い傾向。</li> <li>・70代、60代、10-20代の順に高く、70代女性が 7.27 で最高。</li> <li>・幸福度の分布はふたこぶ型、5 と 7～8 が高い。</li> </ul>
② 生活満足度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全体平均：男性 6.53 女性 6.57、全般的に女性が高い傾向。</li> <li>・70代、60代、10-20代の順に高く、70代女性が 7.28 で最高。</li> <li>・生活満足度の分布はふたこぶ型、5 と 7～8 が高い。</li> </ul>
③ 5年後の幸福度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全体平均：男性 6.27 女性 6.57、全般的に女性が高い傾向。</li> <li>・70代、60代、10-20代の順に高く、70代女性が 6.89 で最高。</li> <li>・5年後の幸福度の分布はふたこぶ型、5 と 7～8 が高い。</li> </ul>
④ 町内の幸福度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全体平均：男性 6.28 女性 6.43、全般的に女性が高い傾向。</li> <li>・70代、60代、10-20代の順に高く、70代女性が 6.82 で最高。</li> <li>・町内の幸福度の分布は、ふたこぶ型、5 と 7 が高い。</li> </ul>
⑤ 周りも楽しい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全体平均：男性 3.21 女性 3.28、全般的に女性が高い傾向。</li> <li>・70代、60代、10-20代の順に高いがスコアはほぼ変わらない。</li> <li>・70代女性が 3.39 で最高、次いで、70代女性の 3.3。</li> <li>・スコアの分布は、3～4 に集中。</li> </ul>

市町村調査の結果から幸福度および生活満足度に影響を及ぼす因子をみる。

因子	幸福度に影響	生活満足度に影響
都市環境	どれも緩やかな相関を示すが、「公共空間」や「事故・犯罪対策」は幸福度との相関が高い。	ほぼ全ての都市環境の因子で相関性が高い。
自然環境	どの組み合わせも相関性が低い。	「環境共生」、「自然災害」は相関性が高い。
地域の人間関係	<u>「地域とのつながり」や「多様性と寛容性」は相関性が高い。</u>	「地域とのつながり」、「多様性と寛容性」は相関性が高い。
自分らしい生き方	「自己効力感」、「健康状態」、「文化・芸術」、「教育機会」は相関性が高い。	いずれも相関性が高い。

出所：一般社団法人スマートシティ・インスティテュート(2023)「地域幸福度（Well-Being）指標」<sup>21</sup>

### (3) 考察

調査結果から、幸福度に影響をもたらす因子と観光との関連性を考察する。

- ① 生活環境：都市環境、自然環境は、観光客の集中や資源の観光利用等により、ポジティブ、ネガティブの双方の影響をもたらすことから、観光との相関性が想定される。
- ② 地域の人間関係：「地域とのつながり」、「多様性と寛容性」では、地域が、インバウンドを含む多様な観光客の受け皿となることから、地域内での連携した取り組みや受容性などの面で、観光との相関が想定される。

調査結果を通して「町の幸福度」と強い相関性が示唆された、「地域とつながり」と「多様性と寛容性」に注目する。町の幸福度とこの2項目との間に強い相関がみられた地域は20地域である。この20地域の共通点のひとつに、「農泊」や「グリーン・ツーリズム」など農林水産業・農山漁村地域を持続可能とするために観光を活用した地域づくりや地域活性化が推進されていることがあげられる。20地域の多くが、農林水産省により「農泊推進地」としての認定を受けている、あるいは、同省の「農山漁村の宝」に表彰され取り組みが評価されている、または、農泊を推進する主体があり取り組みが進んでいる（表4）。農林水産省では、「農泊」の実践に当り、自治体や観光協会をはじめ、地域の様々な組織や団体が参画する「地域協議会」などを設置し地域の意思統一を図り推進することが重要であると強調している。そのため、農泊推進地の多くでは、地域内での農泊活動推進のリーダーシップを担う地域協議会あるいは中核法人を立ち上げ、自立的ビジネスとしての「農泊」が継続運営できるしくみが構築され、農山漁村の所得向上と地域活性化の実現を目標とした持続可能な観光による地域づくりが実践されていることが想定される。

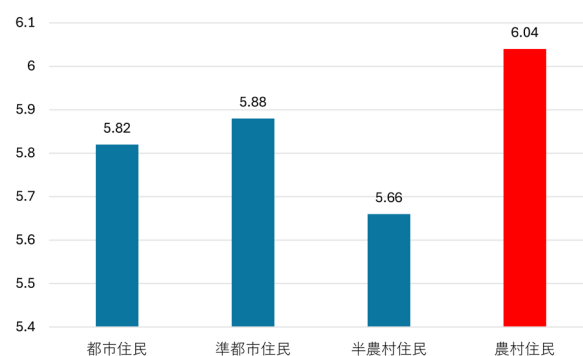
表4 農泊推進地における幸福度と「地域のつながり」「多様性・寛容性」との相関

地域	町内の幸福度	地域のつながり	多様性・寛容性	推進主体	備考
全国平均	0.57	0.36	0.23		
山形県 山形市	0.61	0.49	0.41	山形県グリーン・ツーリズム推進協議会	農泊認定地
栃木県 佐野市	0.62	0.47	0.43	さのアグリツーリズム推進協議会	農泊認定地
群馬県 高崎市	0.70	0.41	0.43	「榛名まちづくりネット」グリーンツーリズム推進委員会	その他
神奈川県 平塚市	0.55	0.54	0.42	平塚市漁業協同組合	農山漁村の宝表彰
神奈川県 厚木市	0.62	0.53	0.47	飯山農業校・飯山クラインガルテン	その他
神奈川県 伊勢原市	0.78	0.54	0.43	株式会社めぐりかぶしがいいやめ	農山漁村の宝表彰
富山県 高岡市	0.63	0.54	0.46	高岡市北部地域グリーンツーリズム推進協議会	その他
石川県 能美市	0.74	0.54	0.40	能美市国造地区ゆたかなくらし協議会（農産漁村振興交付金）→農村DXに発展	その他
岐阜県 下呂市	0.64	0.41	0.40	（一社）馬瀬地方自然公園づくり協議会	農泊認定地
静岡県 掛川市	0.49	0.59	0.44	かけがわ葉ヶ岳山麓農泊推進協議会	農泊認定地
愛知県 大府市	0.58	0.47	0.44	農業経営基盤の強化に関する基本的構想	その他
滋賀県 栗東市	0.58	0.46	0.43	奥こんげ農泊推進協議会	農泊認定地
京都府 福知山市	0.59	0.41	0.45	海の京都農泊推進協議会	農泊認定地
京都府 京田辺市	0.46	0.52	0.43	一般社団法人京都山城地域振興社	農泊認定地
大阪府 大東市	0.65	0.46	0.40	—	その他
大阪府 羽曳野市	0.63	0.55	0.40	かわち夢楽 「河南町かうち地区農と自然を守る協議会」	その他
兵庫県 たつの市	0.55	0.53	0.42	ひょうごグリーンツーリズム 中播磨県民センター農泊	その他
広島県 福山市	0.63	0.54	0.45	瀬の浦農泊推進協議会	農泊認定地
山口県 防府市	0.74	0.56	0.51	山口防府地域農山漁村女性連携会議	その他
愛媛県 今治市	0.50	0.52	0.46	特定非営利活動法人シクロツーリズムしまなみ	農泊認定地
				桜井地区地域水産業再生委員会	

出所：一般社団法人スマートシティ・インスティテュート「地域幸福度（Well-Being）指標 令和5年度 全国調査結果」をもとに著者作成<sup>22</sup>

農林水産政策研究所の調査（2015）<sup>23</sup>によると、都市住民に比べると平均所得が低い農村住民の幸福度が高いことがわかった（図5）。幸福度には、所得・経済環境や利便性以外の要因の影響を受けていることが示唆される。また、都市住民は所得が上昇するほど幸福度が上がる一方、農村住民

図5 居住地ごとの幸福度の平均



出典：農林水産政策研究所調査（2015）

は人とのつながりや信頼関係が豊かな人ほど幸福度が高いことも明らかにされている。数々の先行研究(田中 et.al 2013)<sup>24</sup>からは、物質的に豊かな社会になるにつれて、経済的な豊かさが必ずしも人々の幸福を実現することはできないことや健康状態や社会的つながりなど複数の要因が複合的に人々の幸福に関連していることが示されている。また、国内の農村地域を対象とした調査(田中 et.al 2014)<sup>25</sup>からは、農村地域の住民は個人的な要因に加え、その地域の社会関係資本などの地域的要因も幸福度に影響することや住民の幸福度そのものには地域差はないが、その構成要素の評価には地域差があることも示されている。

農村は水や気候などの環境面、精神的・文化的な背景から、地域固有の様々な

価値を提供している。地域固有の価値を有する農村には、「農村社会に継承されているルールを遵守する気風」や「農村社会に備わった合意形成力」を有する農村コミュニティが存在する（農林水産省、2017）<sup>25</sup>。社会関係資本の基盤がある地域で、地域主体（コミュニティベース）による観光を推進することで、多様性に寛容な社会を育み、住民の幸福度を高めている可能性が示唆される。「多様性と寛容性」に満ちた社会は、「自己決定力」を支える。「自己決定度」は幸福度に大きく影響を与えることも先行研究から示されている。「多様性と寛容性」は、観光が大きく貢献できる分野であり、視野を広げることにもつながる。「視野の広い人は幸福感の高い人である」<sup>26</sup>という研究結果からも「多様性と寛容性」を高める観光が幸福度に貢献しうるといえよう。

ここでの考察を支える利用可能なデータが不足していることから、今後は、「地域主体」に注目しながら、旅行者の満足度だけでなく、地域で観光推進に携わる人々の満足度の調査のほか、農村地域と農泊推進地との比較やその他のタイプの地域をとりあげ、生活環境・都市環境および地域の人間関係と観光の相関を検証していく実証的研究の積み重ねが必要である。

## 5. コミュニティウェルビーイングと持続可能な観光

### ～農泊推進地に学ぶ地域づくり

幸福度と観光との関係性が示唆される農泊推進地から、ウェルビーイングな地域づくりを学べる点は少なくない。農泊の定義や目的、日本における取り組みや推進の経緯を確認する。

#### （1）農泊の定義と目的

農林水産省では、「農泊」を、農山漁村に宿泊し、滞在中に地域資源を活用した食事や体験等を楽しむ「農山漁村滞在型旅行」<sup>27</sup>と定義している。「農泊」の狙いは、古民家・ジビエ・棚田など農山漁村ならではの地域資源を活用した様々な観光コンテンツを提供し、農山漁村への長時間の滞在と消費を促すことにより、農山漁村における「しごと」を作り出し、持続的な収益を確保して地域に雇用を生み出すとともに、農山漁村への移住・定住も見据えた関係人口の創出の入り口とすることとしている。農林水産省により、以下の評価基準を満たす地域へ



の支援が行われ、令和4年度までに全国で621の農泊地域を創出されている。

### ＜農山漁村振興交付金事業実施提案書評価基準＞

合意形成の手法	農泊を実施のため、地域の課題や取組方針を関係者間で共有し合意形成を行っていくための適切な手法が取られている。
農泊実施のための実施体制の適格性	・農泊を継続的に実施のための法人を含む農泊実施体制になっている、又は今後の法人化に向けた具体的な検討されている。 ・ビジネス化に向けてノウハウを持つ人材、従業員等の確保、農泊の持続的な取組のための具体的な検討がなされている。
地域資源の活用	従来からの観光資源のほか、古民家、地域食材、地域特有の体験など地域資源を活かした観光コンテンツの磨き上げを含む。
マーケティング手法等の有効性	ターゲットの明確化、戦略的な広報や営業活動などマーケティングの手法が適切に検討されている。
農林漁業者等への裨益	農泊の取組を通じて参画する農林漁業者への所得向上又は雇用創出にどのように寄与するのかが明確にされている。
創意工夫等	事業の効率性や成果を高めるための創意工夫が見受けられ、他の地域へのモデルになり得る。
行政との連携の有無	市町村が事業実施主体に参画又は連携体として関わっている。 若しくは都道府県で行う広域ネットワーク推進事業において農泊実施地域として選定された団体である。

出典：農林水産省 農泊サイト「令和6年度農山漁村振興交付金 公募要項」より筆者作成<sup>28</sup>

## （２）日本における農泊に関わる動き

農山漁村地域の活性化の手段として農泊への注目が高まっていた1992年、農林水産省内にグリーン・ツーリズム研究会が設置された。当時、欧州では、農村に滞在しバカンスを過ごすという余暇の過ごし方が普及していた。英国ではルーラル・ツーリズムやグリーン・ツーリズム、フランスではツーリズム・ベール、イタリアではアグリツーリズムなどと呼ばれている<sup>29</sup>。日本においても、欧州型の余暇活動の推進を目指して研究が進められ、「グリーン・ツーリズム」を「農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動」と定義づけた。1994年には、「農山漁村余暇法（農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律）」が成立、本格的な農山漁村地域における観光の取り組みが展開されはじめた。本法律の目的は以下である；

- ① ゆとりのある国民生活の確保と農山漁村地域の振興に寄与するため、農山漁村滞在型余暇活動のための基盤の整備を促進すること
- ② 農村滞在型余暇活動に資するための機能の整備を促進するための措置、農林漁業体験民宿業の登録制度を実施すること

農泊推進において重要な役割を担う農林漁業体験民宿の経営者は、当初、農林漁業者に限定されていたが、登録制度の一層の活用を図ることなどを目的に2005年6月に法律が改正され、農山漁村余暇法に定める登録基準を満たせば農林漁業・農山漁村文化等の体験を自らまたは地域の農林漁業者等と連携して提供できる宿泊施設も登録できるようになった。グリーン・ツーリズムの教育的効果への注目も高まり、2008年からは農林水産省だけでなく文部科学省、総務省も一体となり、子どもたちの学ぶ意欲や自立心、思いやりの心、規範意識などを育み、力強い成長を支える教育活動として、小学校では農山漁村での長期宿泊体験活動を推進する「子ども農山漁村交流プロジェクト」が始まった。

また、インバウンドの増加を背景に、2016年には、国を挙げて「観光先進国」を目指す「明日の日本を支える観光ビジョン」が発表され、「滞在型農山漁村の確立・形成」が施策の一つに盛り込まれた。このころからグリーン・ツーリズムに代わって「農泊」が「日本ならではの伝統的な生活体験と非農家を含む農村地域の人々との交流を楽しむ」滞在（農山漁村滞在型旅行）を指す形で使われるようになった。農泊が全国展開される中、違法民泊への対応を目的に、民泊新法が2018年に制定され、農家が宿泊を伴う「農泊」サービスを提供する場合は、「住宅宿泊事業法（民泊新法）」に定める届出を行う「農家民泊」、あるいは、「旅館業法」に基づく許可の取得が義務付けられている「農家民宿」のいずれかの形態を選択し営業することになる。2017年策定の「観光立国推進基本計画」では、2020年度までに「農泊地域」を500地域創出し、取組地域の自立的発展と農山漁村の所得向上を目指す目標が掲げられた。「農泊」をビジネスとして実施するための現場実施体制の構築、地域資源を魅力ある観光コンテンツとして磨き上げる取り組み（農林漁業体験プログラム等の企画、古民家等を活用した滞在施設等の整備）、優良地域の国内外へのプロモーション支援を行う「農山漁村振興交付金」に農泊推進対策が新設され、観光庁等とも連携しながら「農泊」の推進が

強化された。一方で、事業者の高齢化等、実施体制の確保・継続に課題がみられる地域も少なくない。コロナ禍を経て、農泊需要の復活を目指し、農山漁村地域の活性化・所得向上、移住・定住も見据えた関係人口創出の観点からの農泊の取組が進行中である。

農泊推進においては、数々の先行事例から、地域が目指す方向性（ビジョン）の共有、地域内連携・役割分担等、地域の合意形成のもとで、地域一体での持続可能な観光を推進する体制整備の重要性が示唆されている。ここでは、農泊先進事例として、兵庫県丹波篠山市と長野県飯山市に注目する。

兵庫県丹波篠山市の丸山地区は、2008 年当時、全戸 12 軒の小さな集落で、そのうち 7 軒が空き家だった。集落消滅の危機を回避するために、住民による年間 14 回にわたるワークショップを経て、古民家を再生し、「集落の暮らし」を体験する宿泊営業を行う方向性がまとまった。2009 年には、NPO 法人集落丸山が発足し、住民が主体となり、古民家 2 軒を宿泊施設として運営、その他の空き家でもレストランを運営するなど、有効活用を進めたことで宿泊者が増加した。村ぐるみの運営、おもてなしや集落環境の「居心地」の良さが高く評価され、稼働率も目標の 3 割程度を維持している。加えて、都市住民向けの田んぼオーナー制度による米作り、黒豆栽培等の交流事業の実施により、2.1 ヘクタールの耕作放棄地が完全に解消、移住者なども増え、2017 年には住民が 8 世帯まで回復、現在、12 世帯 26 人が暮らしている。丹波篠山市は現在、「人・自然・文化が織りなす食と農の都」の実現を目指しており、同市のまちづくりに対する市民意識調査（2019）<sup>30</sup>では、半数以上が「住みよい」、約 6 割が「愛着を感じる」、7 割以上が「住み続けたい」と回答している。

長野県飯山市は、スノーリゾートとして人気が高く、かつてはスキー客で賑わっていたが、バブル崩壊後にスキー客が激減した。また、旅行者ニーズの変化、地域人材の高齢化や後継者不足などから、冬季以外のグリーンシーズンの経営が課題となった。滞在交流型の観光への転換を目指し、地域資源を生かしつつ、農業と連携したグリーン・ツーリズムに対応していくための拠点となる交流・体験施設の整備が急務となった。そこで、1994 年に「飯山市グリーンツーリズム推進協議会」が発足され、市・J A・観光協会が中心となり、それぞれが有する素材を生かし連携をしながら農泊事業が推進されてきた。農家民宿では首都圏

の小・中・高校の環境教育の一環として自然体験教室や農作業体験などを取り入れた修学旅行を受け入れ、当初の3校から2016年には65校に増えた。体験農園等の体験プログラムも充実し、都市間交流は年々盛んになり、グリーンシーズンの入込客がホワイトシーズンを上回るほどになった。近年はインバウンドの増加や移住先としての注目も高い。飯山市のまちづくり市民アンケート調査（2023）<sup>31</sup>では、暮らしやすいと感じる人は約56%、誇りや愛着を感じる人は約75%だった。また、30代の若者世代を中心に移住者が増加傾向で、2021年度の移住者数は過去最高の174人と人口減の改善につながっている。移住の理由には「生活環境が良い」「自然が豊か」「子育て環境の良さ」「飯山の人柄の良さ」「農産物」「利便性」などが挙げられている。

この2つの事例のほか農泊先進事例に共通する点は、地域のつながりと合意形成に基づく地域主体の持続可能な観光が推進されていることである。一過性の誘客ではなく地域内好循環が継続的に創出されるしくみが地域活性化につながっている。農村以外の地域にも持続可能な観光地域づくりの参考となろう。

### （3）観光はコミュニティウェルビーイングに貢献するのか

観光は経済面だけでなく、環境保護、文化の保全、貧困の削減、自然遺産や文化遺産の保護・継承、地域社会のエンパワーメント、貿易の機会創出、平和と異文化理解の醸成などにおいても貢献する分野である（国連世界観光機関、2014、2021）<sup>32</sup>。これらの分野は、幸福度と関連しうる因子である。近年では、観光による様々な効果が注目され、社会課題や地域課題に対応する解決策のひとつとしての観光が有する社会的役割への期待が高まっている。少子高齢化が進む地域では、地域活性化の手段として観光に取り組む地域も少なくない。一過性の集客手段としての観光ではなく、地域内の好循環を創出する「持続可能な観光」の視点が不可欠である。農泊事例からもわかるように、住民を含む地域関係者で合意された「地域の目指す姿」に向けて、地域一体となり、地域主体での持続可能な観光が推進されている場合に、観光によるウェルビーイングへの効果が発揮される。一部の地域では、観光客の集中に伴うオーバーツーリズムの課題が深刻化している。地域での本物体験や生活文化へと旅行者の関心が高まるほど、地域の暮らしや人々への観光の影響への注視が必要である。観光地を小さなコミュニ

ティ単位でモニタリングし、特定エリアでの課題の予兆を早期に把握し、その深刻化を未然に防ぐことで、「住んでよし、訪れてよし」の地域が実現しうる。観光推進地域における持続可能性のモニタリングシステムの導入と共に、ウェルビーイングの観点からの観光効果を測定することで、ウェルビーイングな地域づくりに向けた観光の活用や「よりよい観光」の広がりが期待される。

## 6. 今後の課題と展望

本研究では、先行研究や公表データに基づき、観光とウェルビーイングの関連性の考察を行った。主に以下が仮説として示唆された。

- ・活用されているウェルビーイング指標には観光に関連する因子が含まれる。
- ・農泊推進地では、幸福度と「地域のつながり」「多様性・寛容性」との相関が強い。「地域のつながり」「多様性・寛容性」は、観光との関係が深い。
- ・地域のつながりが強い農村地域において、地域主体の持続可能な観光を推進することで、地域のウェルビーイングへの貢献が期待される。
- ・農村地域以外の地域でも、地域主体の持続可能な観光を推進する地域では、観光によるウェルビーイングへのプラスの効果が期待される。

これまで、ウェルビーイングの視点からの地域にもたらす観光効果の研究やその測定についての検討は、十分に行われていない。また、観光とウェルビーイングの関係を解明するために利用可能な信頼できるデータが不足しているのが現状である。

日本では、2020年に持続可能な観光の国際基準に準拠した「日本版持続可能な観光ガイドライン（JSTS-D）」<sup>33</sup>が策定され、持続可能な観光を推進するにあたっての指針が指標とともに提示されている。本ガイドラインの活用とあわせて、ウェルビーイング視点での観光の効果の測定を取り入れることで、地域や住民、そして、観光客にとっての「よりよい観光」、地域やそのコミュニティのウェルビーイングに貢献する観光の推進につながるものとなろう。

今後は、多様なタイプの地域をとりあげ、ウェルビーイングと持続可能な観光との関連性についての実証的研究と理論的かつ実践的な検討を積み重ねながら、観光、ウェルビーイング等、関係する分野の専門家、研究者や研究機関等と連携した継続的な研究が望まれる。



## 引用・参考文献

1. 観光庁 (2023)「地域における持続可能な観光の実現に向けた調査業務報告書の調査」(2024 年 3 月 28 日 18 時最終検索結果)
2. 世界保健機関 (1948)「世界保健機関憲章」
3. Layard, R. (2006) *Happiness: Lessons from A New Science*, Penguin, London
4. Diener, E., Suh, E., & Oishi, S. (1997) Recent findings on subjective well-being. *Indian Journal of Clinical Psychology*, 24(1), pp. 25-41.
5. Diener, E., Emmons, R.A., Larsen, R.J., & Griffin, S. (1985) The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment*, 49, pp.71-75.  
(SWLS の日本語訳 角野 善司 (1995)「人生に対する肯定的評価尺度の作成(1)」 日本教育心理学会第 37 回総会発表論文集 95 から引用)
6. Ryff, C. D. (1989) Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being. *J Pers Soc Psychol*, 57(6), 1069.
7. Kahneman, D. & Tversky, A (1979) Prospect theory : An analysis of decision under risk. *Econometrica*, 47(2), pp. 263-269.
8. Kahneman D, Deaton A. (2010) High income improves evaluation of life but not emotional well-being. *Proc Natl Acad Sci U S A*.
9. 前野隆司(2012)「幸せのメカニズム 実践、幸福学入門」講談社
10. Killingsworth MA, Kahneman D, Mellers B. (2023) Income and emotional well-being: A conflict resolved. *Proc Natl Acad Sci U S A*.
11. Seligman, M.E.P., & Csikszentmihalyi, M. (2000). Positive psychology: An introduction. *American Psychologist*, pp. 55,5-14.
12. Csikszentmihalyi, M. (1990) *Flow: The psychology of optimal experience*. New York: Harper Collins. (チクセントミハイ,M.今村 浩明 (訳) (1996) フロー体験—喜びの現象学— 世界思想社)
13. 佐伯政男、蓮沼理佳、前野隆司(2012)「主観的ウェルビーイングとその心理的要因の関係」日本心理学会誌第 76 回大会発表論文集
14. 国土交通省(2021)「国土交通白書 2021」国土交通省
15. 松下 美帆(2023) ウェルビーイング指標の政策活用:海外事例と日本への示唆」一橋大学経済研究所世代間問題研究機構

16. OECD (2011) How's Life?: Measuring Well-being, OECD Publishing, Paris,  
(邦訳：徳永優子，来田誠一郎，西村美由起，矢倉美登里訳「OECD 幸福度白書：より良い暮らし指標：生活向上と社会進歩の国際比較」明石書店、2012 年)
17. OECD (2017a) How's Life? 2017: Measuring Well-being, OECD Publishing, Paris, (邦訳：西村美由起訳「OECD 幸福度白書 4：より良い暮らし指標：生活向上と社会進歩の国際比較」明石書店、2019 年)
18. OECD (2019) How's Life? 2019: Measuring Well-being, OECD Publishing, Paris, (邦訳：西村美由起訳「OECD 幸福度白書 5：より良い暮らし指標：生活向上と社会進歩の国際比較」明石書店、2021 年)
19. 内閣府政策統括官（経済社会システム担当）付参事官（総括担当）西崎 寿美（2020）「内閣府における経済・財政一体改革、満足度調査の取組」内閣府（2024 年 3 月 28 日 18 時最終検索結果）
20. 内閣府政策統括官（経済社会システム担当）（2023）「満足度・生活の質に関する調査報告書 2023 ～我が国の Well-being の動向～」内閣府（2024 年 3 月 28 日 18 時最終検索結果）
21. デジタル庁(2023)「デジタル田園都市国家構想」  
(2024 年 3 月 28 日 18 時最終検索結果)
22. 一般社団法人スマートシティ・インスティテュート(2023)「地域幸福度 (Well-Being) 指標」(2024 年 3 月 28 日 18 時最終検索結果)
23. 一般社団法人スマートシティ・インスティテュート 専務理事 南雲岳彦 (2023)「地域幸福度 (Well-Being ) 指標 令和 5 年度全国調査結果」一般社団法人スマートシティ・インスティテュート (2024 年 3 月 28 日 18 時最終検索結果)
24. 農林水産政策研究所(2015)「2015 年度 研究ピックアップ 都市住民に比べて農村住民の幸福度は高い？何が人々の幸福度に影響を与えるのか」農林水産政策研究所 (2024 年 3 月 28 日 18 時最終検索結果)
25. 田中里奈、橋本禅、星野敏、清水夏樹、九鬼康彰 (2013)「居住地域の特性が住民の主観的幸福度に与える影響」農村計画学会誌, 32 (論文特集号)、pp.167－172
26. 農村におけるソーシャル・キャピタル研究会 農林水産省農村振興局

- (2007)「農村のソーシャル・キャピタル」～豊かな人間関係の維持・再生に向けて～ 農林水産省
27. Basso, M. R., Schefft, B. K., Ris, M. D., & Dember, W. N. (1996) Mood and global-local visual processing. Journal of the International Neuropsychological Society, 2, pp. 249-255.
28. 農林水産省(2024)「農泊の推進について」  
(2024年3月28日18時最終検索結果)
29. 農林水産省(2024)「令和6年度農山漁村振興交付金 公募要領」別紙7-1  
[https://www.maff.go.jp/j/supply/hozyo/nousin/240209\\_301-7.html](https://www.maff.go.jp/j/supply/hozyo/nousin/240209_301-7.html)
30. 五艘みどり(2017)「持続的農村形成に向けたルーラルツーリズムの研究動向」立教観光学研究紀要 第19号2017年3月, pp. 27-37
31. 京都府丹波篠山市 (2019)「市民意識調査」  
(2024年3月28日18時最終検索結果)
32. 長野県飯山市 (2023)「飯山市第6次総合計画」  
(2024年3月28日18時最終検索結果)
33. 国連世界観光機関 (UNWTO) (2014、2021)「世界観光倫理憲章および関連文書」国連世界観光機関 (UNWTO)  
\*2024年1月に略称を UNWTO から UN Tourism に変更
34. 観光庁・UNWTO 駐日事務所 (2020)「日本版持続可能な観光ガイドライン (JSTS-D)、観光庁・UNWTO 駐日事務所